



▲検体を採取する様子



▲病室に入る看護師は防護服を着用して看護に当たります



▲市民の皆さんから贈られた多くの応援メッセージ。不安な気持ちを抱えながら未知のウイルスに向き合う医療スタッフにとって大きな励みとなりました

新型コロナウイルスへの対応は私たちにあってまさに戦いで、感染症患者の診療・看護と急激に増加した業務は、全ての職員に大きな負荷となりました。しかし、「逆境をチャンスに変える！」を合言葉に、Web問診やオンライン面会、診療科や部門を超えた応援体制を整えました。特に看護師は一人一人が真摯に看護に従事し、看護体制を柔軟に変化させ乗り越えてきました。今回、市民病院としての役割を果たすべく対応した経験は、これからの超高齢社会にも対応できる自信となりました。

第一線で働く看護師をはじめ、全ての職員を感染させないために病院一丸となって環境を整えたことも、院内感染の防止につながったと考えています。

最後に、市民病院を応援してくださった市民の皆さま、学校、企業、各種団体の皆さまに心よりお礼を申し上げますとともに、引き続き感染防止対策の徹底にご協力をお願いいたします。



院長 加藤健司

患者の治療

新型コロナウイルス感染症流行初期は治療方法が確立しておらず、同じ医療圏である一宮市立市民病院の医師らと連携し、患者の治療についてオンラインで協議を行いました。新型コロナウイルス感染症は、発熱、息苦しさ、倦怠感などの症状に加えて、入院など慣れない隔離生活による気力や食欲の低下、体力の消耗などが起こります。そのため、点滴などの治療だけでなく、理学療法士による呼吸リハビリや運動リハビ

稲沢市民病院と 新型コロナウイルス感染症 2年間の軌跡

問合先 市民病院管理課 ☎ 0587(32)2111



未だに発生源が解明されず、次々と変異株が確認される新型コロナウイルス。未知のウイルスと向き合い、懸命に対応する稲沢市民病院の最前線をご紹介します。

市民の命を守る

令和2年3月、稲沢市民病院は新型コロナウイルス感染症患者の受け入れを開始しました。しかし、当時は感染症の専用病床はなく、医療スタッフにも大きな不安がありました。市民病院として市民の命を守るという使命感から、患者の受け入れを決定しました。受け入れの際には院内感染を防ぐため、一つの病棟を感染症患者専用とし、医師、看護師、栄養士、理学療法士などの多職種が連携して、患者の治療に当たりました。



▲感染症患者専用病棟の病室へ入る看護師

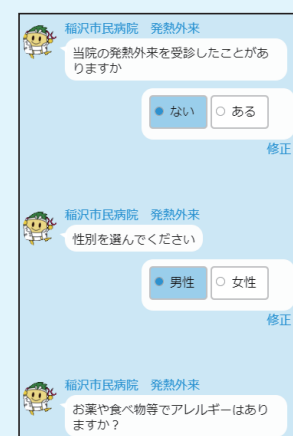
発熱外来の開設

感染症は早期発見・早期治療することで周囲への感染を防止し、重症化を防ぎます。市内でのクラスターの発生を防ぐためには、発熱者の検査を迅速に行う必要があります。令和2年4月に発熱症状のある患者のための「発熱外来」を開設し、

1万3000件以上の新型コロナウイルス感染症の検査を行い、7800人以上の患者を受け入れました。

当院は、全病棟に空気感染防止のための陰圧室を一式設置するほか、感染症の専門医・看護師が全職員に感染症に対する教育を行うなど、以前から感染対策に注力してきましたが、院内感染が発生すれば、医療崩壊は避けられません。患者の院内での滞在時間を極力減らすため、事前に患者の問診ができるWeb問診を考案しました。診察の流れとしては

- ①Web問診
- ②問診後、患者が病院に到着
- ③防護服を身に付けた看護師が駐車場へ出向いて検体を採取
- ④医師が電話で診察となります。このような取り組みにより、接触を最小限に留めました。当院では、令和3年までに300人以上の新型コロナウイルス感染症患者の入院・治療を行ってきましたが、院内感染の発生には至っていません。



▲Web問診は全国の学会などでも高い評価を得ました